

DAIによる本校生徒の実態と指導上の問題点

西蒲原郡亀田町立亀田中学校教諭 庭 野 五 郎

はじめに

人格形成に関し、中学生時代はその発達的な変化がいちじるしく、とかく問題をおこしやすい。そこで、本校生徒にも個人的な心身、環境的な家庭や学校などの適応に関する問題があると考えられるので、心理検査によりこれらの実態を明らかにするとともに、本校での生活指導、教育相談のあり方や指導上の問題点を、地域性との関連において考察する。この目的に基づいて、DAIおよびその他の検査(YGT, AAIなど)を先に1, 2年生を調査対象にして実施した。ここではDAIの実施結果を中心とし、その検査構成に即してまとめ記述する。

I 家庭に関する認知・反応の傾向

1 認知の傾向について

〔表1〕家庭適応に関する項目別回答(%) N=200

認 知 傾 向				反 応 傾 向			
H ₁	不適応	適 応	?	H ₂	不適応	適 応	?
1	34.0	59.0	7.0	1	30.0	63.5	6.5
2	9.5	82.5	8.0	2	7.5	88.0	4.5
3	20.5	61.5	18.0	3	27.5	59.5	13.0
4	7.0	83.0	10.0	4	37.0	52.0	11.0
5	11.5	71.5	17.0	5	16.5	76.0	7.5
6	15.5	58.0	26.5	6	42.5	39.0	18.0
7	11.0	79.5	9.5	7	10.0	80.5	9.5
8	12.5	72.0	15.5	8	4.0	92.5	3.5
9	3.0	94.5	2.5	9	2.0	92.0	6.0
10	26.5	60.0	13.5	10	3.0	91.5	5.5
11	4.0	88.5	7.5	11	2.5	92.5	5.0
12	3.0	84.5	12.5	12	23.5	58.5	18.0
13	2.5	82.0	15.5	13	23.5	68.5	8.0
14	3.5	92.0	4.5	14	22.5	72.0	5.5
15	1.5	72.5	26.0	15	7.0	88.5	4.5

表1は、Adスコアの得点算出基準により百分率で示したものである。特に問題性のある認知の項目は1・3・6・10であり、1・3・6は親子関係に関するものである。したがって、子どもの人格に対する親の無理解や無関心、親子の相互理解の欠如、親の子どもへの過度な期待、親子の世代差による生活感覚などにこの問題が関連すると思われる。

2 反応の傾向について

表1から、特に問題性のある反応の項目は1・4・6に多く、12・13・14にもみられる。これらは、家庭からの逃避傾向、家庭への反抗であり、また逆に、これが他の家庭へのせん望に転化したり、親子関係を阻害することにもなると考えられる。

II 社会(学校)に関する認知・反応の傾向

1 認知の傾向について

社会に関する認知の傾向としては一般的に問題性が少なく、こゝで考えられることは？回答が多いことでその適応的な反応で全調査対象人数の50%台のもの6項目、？が40%以上のものが4項目と目立つ。これについては、それらの項目の内容から考えて、調査対象が1年生であることや、検査が強制速度法によるなどのために、家庭、個人に関する問題とことなり、ふじゅうぶんな回答があったのではないかと考えられる。したがって回答の傾向としてはかなり高い不適応傾向がみられる。又〔資料1〕によれば、学校生活における問題も少くないことがわかる。

〔資料1〕 学校生活意識調査より(%) 1年生 N=170人

2 反応傾向について

認知の傾向に対し反応の傾向ではかなり問題性を示す回答が見られる。こゝでは友人からの逃避や、集団への適応性を欠く傾向が強くあらわれ、友達との人間関係の悪化が目立っている。

№	項 目	回答
1	きれいな人がいて学級や班がおもしろくない	28.6
2	自分の計画が他の人によって乱されてしまう	26.0
3	まわりの席がうるさくて困る	21.3
4	人に悪口をいわれると気になって困る	16.5
5	不愉快なあだなをつけられていやだ	15.4
6	先生に質問しにくい	15.7
7	友人がいない	2.3
8	クラブをやめたい	2.1

Ⅲ 身体に関する認知 反応の傾向

1 認知の傾向について

〔表2〕 不適応傾向の中央値による集団判定

表1、表2によれば、身体に関する認知・反応に、適応上の問題が最も多く、また標準からの逸脱が高い。すなわち、Ad類型でC型が7.8%でCR型を含めれば9.8%、全体の約10%が自分の身体に関して問題意識をもっている。これを項目別にみると、42、43から食物に対してかなり問題性をもち、33、34、35、36から他人との比較において強い劣等意識をもって自分の身体を見ている。さらに、Uスケールについての検討も加えとかなり神経質的な傾向が感じられる。それだけ身体発育のいちじるしいこの時代に、深い関心がよせられており身体適応上に重要な意味をもつ。

セグメン	男子(183名)	女子(155名)
H ₁	普 通	普 通
H ₂	普 通	普 通
S ₁	普 通	普 通
S ₂	普 通	普 通
P ₁	多 い	稍多い
P ₂	普 通	普 通
M ₁	稍多い	普 通
M ₂	普 通	普 通

(男子183名 女子155名)

2 反応の傾向について

このような認知の特異な傾向に対する反応の傾向はきわめて一般的な水準で、特に問題性がみられない。このことから、身体に深い関心をもってはいるが、しかし、それほど深刻な問題としては自覚されないものと解される。特に取りあげれば体力、持久力などに関して神経質的な傾向がみられる。

Ⅳ 精神に関する認知・反応の傾向

〔表3〕 Ad 類型及びPr 傾向の分布の比較(%)

1 認知の傾向について

表2からみて、これに関し一般的には、適応的な反応が比較的少なく、?回答が多い事が認められた。項目別には52, 53, 54のように性格面で認知が悪く、忍耐力, 努力, 決断力および精神の集中力が劣るなど意志薄弱で、自主的な適応力を欠くなどが認められる。

セクション		身体				Pr 傾向		
Ad 類型		C	R	CR	Q	U	In	Ex
男	本校	8.1	2.5	3.1	2.5	12.5	21.9	3.69
	標準	2.8	3.7	1.7	6.8	—	—	—
女	本校	7.4	3.0	0.7	4.4	9.6	17.0	17.8
	標準	4.5	4.5	1.0	9.2	—	—	—
計	本校	7.8	2.7	2.0	3.4	11.2	19.7	28.1
	標準	3.7	4.1	1.6	8.0	約3.0	約3.0	約3.0

2 反応の傾向について

(注) H・S・Mの各セクションは省略

特異な傾向はみられないが、やゝ神経質的傾向や自己否定的な傾向がみられ、また、孤独感や思考の集中ができないなど、内閉的で精神の不健康さが問題とされる。

Ⅴ Pr スケールによる診断

1 U スケールについて

表3によればこのスケールで問題をもつ者が約11.2%でやゝ少ないが、これを図1で見るとP₁P₂のセクションに不適応反応が多く特にP-32が問題となり、特異な精神身体症状を示す傾向を持つ者が多いことがいっそう明らかである。

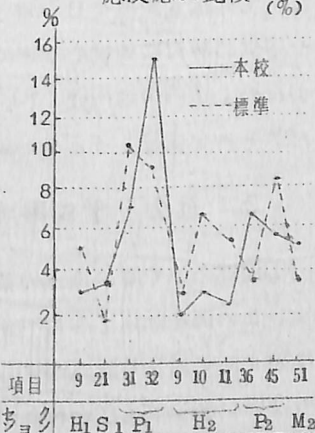
2 In スケールについて

表3によれば、このスケールで検出される者は約20%である。これを表4で見ると、一般に男子が女子に比べて問題が多く、特に社会的、精神的側面に関してかなり問題性が強く、情緒的緊張が強い。

〔表4〕 Inスケールの反応傾向 (%) 注・数値は4捨5入

セクション	P ₁	M ₁			S ₂			P ₂	M ₂		
項目	3.7	4.9	5.1	2.1	2.2	3.0	3.7	4.9	5.6	6.0	
不適応反応	男子	3.0	4.9	2.7	4.0	6.3	1.4	1.0	2.6	3.1	4.7
	女子	1.2	3.1	1.8	2.8	5.5	5	8	3.3	3.2	3.5
	標準	2.6	4.8	1.9	2.7	5.9	1.5	1.4	3.3	3.4	3.8

〔図1〕 Uスケールの不適応反応の比較 (%)



く、逃避的、内罰的な適応行動を持つ者と解される。

3 Ex スケールについて

このスケールによる反応の傾向は28%の反応がみられ、その内容を分析すると、 $e_x = 23.7\%$ 、 $E_x = 4.4\%$ となっており、そして男子に問題を持つ者が多く、全体の約40%となっている。さらに表5では、家庭、社会、精神的面の適応が悪く、早期に適応障害を取り除く事が必要とされる。

〔表5〕 Ex スケールの反応傾向 (%) 注・標準は百分比を四捨五入した。

セクション		H ₁		S ₁			P ₁	M ₁		H ₂		S ₂			P ₂	M ₂
項 目		6	8	23	27	29	34	51	56	12	14	21	25	28	38	54
不適応	男子	20	13	12	4	12	27	27	25	37	26	40	14	24	11	20
	女子	11	12	3	—	4	15	18	14	10	19	28	4	12	12	28
	標準	13	18	16	2	13	15	19	20	17	21	27	7	14	16	20

Ⅵ 教師の観察による本校生徒の実態

1 家庭環境

① 地域性からみた家庭環境では、亀田町が新潟市と新潟市の間にあつて、かつては純農村として栄えてきたが、産業、文化などすべての面で強い影響をうけ、急速に都市化の傾向をたどっている。②しかし、それにもかかわらず、家庭生活の中心には古い農村時代の意識が根強く残り、それらの間にいちじろしい不調和がみられる。③都市化の傾向に伴って給与所得者の増加が目立ち、加えて共稼ぎ家庭や日中留守になる家庭も多く、そこでは家庭生活が投げやりになり、家庭づくりや子供の教育に無関心などの問題傾向が多く見られるようになってきた。④高校の学区が新潟学区のため、市内の名門校に子どもを進学させる事に親が異常な関心を持っている。これが前項とのアンバランスを生じ、子どもが親に対して不信感をいだくなど親子の人間関係にも問題がみられる。

2 社会・学校環境

①前述の如く町の地理的条件から、新潟市に依存的で独自のものがなく、たとえば、生産企業に1、2の例を除いてみるべきものがなく、また、他の農業や商工業などにおいても資源や立地条件に恵まれずあまり活気が見られない。②町全体が雑然として落ち着きを欠き、生活にうるおいが足りない。③学校も広い校舎が雑然として整備不じゅうぶんであり一部校舎は老朽化し学習環境として良好とはいえない。また、施設設備面でも学校のマンモス化と町の財政事情から、充足状況は必ずしも良くなく、学習や友人との人間関係を形成する上で幾多の問題が生ずることも考えられる。

3 身体的健康

中学生時代はからだの発達の上で一番成長がはげしい第二伸長期といわれ、内臓器官の発達にアンバランスが生じ、健康上不安定な時期であり、また、男女のちがいなどもはっきりあらわれてくるいわゆる第二性徴の時期でもある。したがって、身体の問題に関して興味が深く、反面それが

適応障害となる事が多い事も理解できる。

4 精神的な面について

中学生時代は、一般にまた精神的な機能の発達のいちじるしい時期でもある。その特徴は、自我意識が発達し批判力も強くなり、また、理想を追求し、社会性や道徳性が身につくようになってくる。それにつれて思考力もまし、反抗や劣等感を持ったり、あせり、悩むことも多く、感情が豊かになり、感受性も鋭くなる。したがって1、2で記述したような環境条件に対する適応問題も多くでてくることが考えられる。

〔資料2〕 Y. G. T性格分類表(%)

型	男子	女子	計
A	5.0	1.0	3.0
A'	4.0	6.0	5.0
A''	15.0	18.0	16.5
B	1.0	—	0.5
B'	4.0	12.0	8.0
AB	5.0	3.0	4.0
C	7.0	2.0	4.5
C'	3.0	3.0	3.0
AC	4.0	8.0	6.0
D	10.0	8.0	9.0
D'	7.0	11.0	9.0
AD'	5.0	3.0	4.0
E	4.0	1.0	2.5
E'	13.0	15.0	14.0
AE	7.0	6.0	6.5
F	6.0	3.0	4.5

本校生徒の性格的な側面はYGT資料2によれば、平均型が24.5%と多く、調和的適応的なタイプで特に問題はない。しかし、これと並んでD類型とE類型のいわば両極端なタイプが22%、23%とほぼ同じ割合を占めている点は注意を要する。個人的にはE類型に不適応傾向を持つ者やノイローゼ傾向の強い者が多く問題となり、集団ではこれらの調和の問題が考えられねばならない。

その実態は教師の観察によると問題傾向として、①一般的には素直であるが、自主的思考や、積極的な実践力に乏しく、学校でも家庭でも依存心が強い。②困難に打ちかつ意志や精神力、忍耐力に欠けるなどの面が見られる。③全般的に生活の各分野で問題意識を持ちながら、それを解決する努力が見られないなどである。

Ⅵ 事例 Y・T 1年男子

○問題 無断欠席 性行態度不良など

○家庭環境 4才時実母と死別、(その後父、再婚)先妻の子どもの間がうまくゆかず父母は別居、父方の祖母に育てられ盲愛を受ける。

父(公務員)は職場と妻と子の三か所をかけもちで不在がち、兄1人高校中退無職で家でぶらぶらしている。姉1人会社員。現在祖母は病弱でほとんど床にしているという状態である。

○学業成績 中の下、評価点2、田中B式知能検査(偏差値)50

○健康状態 4月 身長154cm 体重60Kg 胸囲83cm
11月 身長160cm 体重76Kg 胸囲92cm >肥満型

胃腸が弱いのに暴食の傾向あり、時々下痢をし、また、足の脚部のけいれん発作がある。

○教師の観察 生活態度が気まぐれで調子にのったり、あげ足とりをする、反面内気で神経質、困難な事にぶつかるとくじけやすい。

○ DAIテストの結果の考察と指導

AdスコアおよびAd類型, Pr傾向

	H ₁	H ₂	?	S ₁	S ₂	?	P ₁	P ₂	?	M ₁	M ₂	?		U	In	Ex
Ad	2	7	0	7	8	3	7	10	2	9	8	1	Pr	3	8	6
類型				CR			CR			R			傾向	○	○	○

○ 家庭環境で問題性があると考えられたにもかかわらず, Ad類型ではややR型と出た。一見楽天的な性格とも考えられる。しかし, Prスケールからみると, Uスケールの反応から家庭内の人間関係に重大な適応上の問題のあることを示している。社会, 身体, 精神の面ではかなりの不適応傾向が認められ問題の深刻さがうかがわれる。特に身体に関しては認知, 反応ともに最悪の反応がみられ, 関連してPr傾向でもIn, Exともに反応は良くなく, 身体や健康の事を気にして悩んでおり, また, 家庭や学校への適応の悪さも本人の家庭環境, 身体的面から理解される。

○ 指導として6月から家庭訪問, 父親の呼び出し相談および本人とのカウンセリング開始, 特にクラブ活動における問題の解決をはかる。学校や地域での生活に常にクラスのリーダーをつけ, 人間関係の改善をはかる。本人とはもちろん, 父親, 祖母, 地区補導委員などとの連携を密接にし, 定期相談も行なう。

○ 結果 2学期から落ち着きも見られ, 現在では特に問題はみられない。しかし, 家庭環境の改善(親子関係)と肥満体質からくる空腹感や活動力の阻害などが解決されない限り, この生徒の適応問題の最終的解決とはならないであろう。

おわりに

1. 以上の結果を総合して, 環境面に比べて個人的問題に関して認知傾向が悪く, 生徒が自己の心身の諸問題に関しては比較的関心も深く, 問題意識も強いことが判定された。すなわち, ここでは個人の環境面の認知・反応の不調和が生徒の人格形成上の障害となり, 不適応な人格を持つ者も少なくない。したがってこの個人と環境とを, どう調和させたらよいかが本校の生徒指導の課題である。

2. また, 本校の地域的条件から生起する諸問題やその影響による適応問題も極めて多く, その指導解決のためには, 地域と学校が一体化してあたる必要がある。

3. 本校の教育相談は, 異なる観点から, 個人指導と集団指導の両面について, 早期に生徒の不適応を見出し, その適応障害を除去し, より望ましい人格形成を目指し, まず教師のこの問題にとり組む共通理解と生徒と教師のレポートをどう深めたらよいかを中心にして, ようやく緒についたところである。

このため, ○教育相談の体制づくり, ○理論研究や技術研修, ○その中でお互いの理解を深めながら実践研究へとその効果を上げつつあり, ○また, 学級活動やクラブ指導, 家庭訪問などすべての機会をとらえて生徒や父兄との接触を深め, 父兄の教育や学校に対する関心を誘発し, ○生徒や父兄との相互信頼感を増し, 家庭や地域の環境改造をはかることをねらいとしている。

DAIという一検査からみた適応問題であるが, さらに, 他の検査や継続指導, 観察により, 期待される人間像へ子どもたちが一步一步近づくための営みを続けたいものと思うものである。